幼児の世紀

岡本好古

劫火の世紀

岡本好古

装幀・挿絵
田島征彦

劫火の世紀

一九七九年四月二八日　第一刷発行

著者―岡本好古（おかもと・よしふる）

発行者―野間省一

発行所―株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二　電話　東京〇三（九四五）一一一一（大代表）　振替　東京八―三九三〇

印刷所―豊国印刷株式会社

製本所―黒柳製本株式会社

定価―九八〇円　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

© YOSHIFURU OKAMOTO 1979 Printed in Japan

0093-306087-2253(0)　（文2）

目次

第一章　くろい黎明　5
第二章　還俗　21
第三章　義教新政　34
第四章　鬼将軍　68
第五章　東の落日　96
第六章　猫と鼠　133
第七章　嘉吉の乱　151
第八章　鬼哭　183
第九章　いばらの園　201
第十章　斜陽　231
あとがき　241

装幀型染絵・本文挿絵—田島征彦

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

劫火の世紀

第一章　くろい黎明

もう梅雨景色になっていておかしくない頃合である。

だが、ここ数日間、京の空は、くらい壁土色にすっかり塗りつぶされているだけで、いまだに一粒の雨も落ちてこない。

木の葉もゆらがぬ無風状態である。だれもが、気分の滅入ることおびただしい。まるでせいいっぱい、天が雨を出し惜しみしているような毎日である。

この時候のせいばかりではない。地上の世相も、何かをものものしくはらんでいる昨今である。

応永三十五年改め正長元年（一四二八年）五月十八日。

時は足利四代将軍義持の世である。

室町幕府も、足利尊氏が開府してからちょうど九十年目、また、「花の御所」「花の公方」の呼称にふさわしく、室町時代初期を絢爛と生きた義満が世を去ってからは二十年目にあたる。

ひとつ、ヨーロッパへ眼を転じると、この三年後にはイギリス軍がフランス救国の少女ジャンヌ・ダルクを火刑に処している。ヨーロッパもキリスト教の重石に抑圧されて、日本と同様に暗い中世紀にあった。

長かった応永の年号もやっと改められるこの応永三十五年は、正月以来何となくうつろで沈滞した感じだった。

まず、松の内からして、毎日がちょうど梅雨と同じ暗鬱な空模様であった。そして、雪も見ない気味悪い暖冬は、いつの間にか春に移り、洛中洛外の桜も、咲くが早いか散りはてる有様で、春を待ちあぐむ風流人士をがっかりさせた。

引続いて、初夏の候がこれもまたべったり曇天続きとなっている。蒼空のもとに青葉を眼ににじませる楽しみも台なしになった。

市井の妻女や下婢は干し物の生乾きをぼやき、公家文人も、これでは歌をよむ気分も殺がれるばかりである。

「お空はどないならはったんや。うっとしいことやで。うすぎたない膏薬をはりつけたみたいやんか。あれは雲とちごうて……ほんまは、お天道はんが壁土で塗りこめてしまはったんとちがうか」

これは他愛もないメルヘンではない。庶民たちは真実そう思って、おそれおののいたのである。

妖怪、魑魅魍魎――の存在を信じて疑わず、ささいな天

象、物象の異常もすぐ凶災の予兆とみなす時代であった。
単純素朴な庶民だけではない。公家、僧、上級武士の支配階層も、年頭からのうち沈んだ空気に予兆めいたものを覚えていた。上下をとわずだれもが先行に不安を抱いている。
現に、大きな不幸がおきている。今出川にある宏壮な室町御所は「沈鬱」そのものと化していた。

将軍義持が病臥したのはわずか三日前である。何の前ぶれもなく、いきなり脚の一部が腫れだし、それはみるみる熱をもって、拳大にふくれ上がった。
かけつけた典医も、一塊の火玉とまごうその患部をみて、思わず顔をそむけた。
この間にも、病人は高熱と発汗が続き、眼をひきつらせ、あつい息をあえがせて、うめき通しだった。
典医は結局、何かの毒が足に侵入した模様——と診立てるしかなかった。この症例は彼もかつてみたことがない。
彼は、いぜんに明国へ渡って研修にはげんだ巧者であり、決して権門に安住して、いいかげんにつとめる医者ではなかった。
ここ二昼夜、彼は徹して、あらん限りの薬石を投じ、看護したのである。だが、病人の高熱とうめきはやまなかった。

昨日、つまり十七日の夕刻になって、典医は居ずまいを改め、枕頭につめる人々へ告げた。熱で赤ぐろくうだった将軍の顔と、典医の蒼白な顔の対照はあざやかすぎた。
「おそれ多いことながら、もはや、これ以上の手だてはありませぬ。お覚悟願うべき時かと存じます」
御所様病臥——の報は、おとといのうちに御所の内はもとより、洛中の幕臣、地方守護、探題——の邸すべてに届いていた。
そこへ、たった一日で「御危篤」の注進が重ねられたのである。
やがて宵の口から夜半にかけて、室町御所のまわりから烏丸大路まで、車駕、かき輿、騎馬武者——がひしめきあう光景になった。
御所の周りや大路の両側の随所に、かがり火がたかれ、車、馬、人の群のあい間に、赤味がかった松明の炎が、泳ぐが如くゆらぎ、大きな火の粉をようしゃなく舞い立てる。
病気見舞いに向う当人たちは、それぞれ、車駕や輿におさまっていて、人影のほとんどは、出長頭巾や平礼烏帽子をつけた供奉の小者や下級武士である。
時節がら、白、うす茶色の麻の衣服であった。彼らがとりつく車駕や輿は、錦地、金銀細工の眼も綾な塊ともいうべきで、さながら、白蟻が美しい小函にたかるような風俗

絵巻となった。

まったく修羅場にひとしいたいへんな雑沓だが……牽制しあったり、昂奮した怒号は、まったくおきなかった。

いいあわせたように、どの群も、声と物音をはばかって、黙々と御所門前の車寄せへ向ったのである。

さすがに、御所様御危篤となると、諸人顔色を変える大事であった。

こうして、夜半には、御所の内部は在洛の高官、公卿をはじめ上下の士大夫でうずまった。

ここで室町幕府の職制をのべると、

――将軍のすぐ下には徳川時代なら大老に当たる、幕臣筆頭の管領がいる。管領職は必ず、畠山、斯波、細川の三家が持回りで担当する。

またその下には、侍所（軍事・御家人の統制）、問注所（訴訟、裁判）、政所（財政）、評定衆（政務合議、裁決）の所司（長官）をつとめる京極、山名、一色、赤松の四家があり、これが四職家である。幕府高官の人選では、三管四職の家門以外から抜擢されることはない。

こうした幕臣のほかに、地方勢力がおり、その主力が全国六十余州をそれぞれ統治する守護職の大名である。なかには、何ヵ国も領有する有力大名があり、幕臣のうちでも、守護職を兼ねる者もあり、また、方々に散らばった荘

園を知行地にしている者もいた。
守護職の下には、小領主の国人、郷族がひかえている。日本じゅうがこうした大小の勢力のモザイク模様のようなもので、そのまん中にある都の幕府は孤城のたたずまいであった。

「御所様のご威光て、えらいもんやなあ。ああっちゅう間に都じゅうの偉いはんを、御所へ吸いこんでしもうたがな。なにがおこったんやろ……」
あくる十八日の早朝、町筋のあちこちで、庶民のあいだに、こうした感想が交された。
気配をかぎとり、情勢を推し測るのに抜目がない上に、口さがない京雀たちもまだ、さし迫った将軍の運命を知るべくもない。
この国開闢以来、庶民を政治に参与させないことは、つねに支配者の鉄則である。

そこは御所のうちでも、いちばん奥まった個所であった。
いつもは、将軍が威儀を正して、守護大名や公卿を引見したり、幕府重臣と頂上会議をもつ大広間である。そこが、いまは病間になっていた。
全体の五分の一に当たる八畳分ほどが三方を御簾で仕切られ、義持の病床に充てられていた。そのまわりに典医、御台所の栄子、それに侍女三人ばかりがひかえている。もうひと刻以上、彼らは、おしの坐像同様だった。
病人は、せわしい息づかいのまま、眼をとざしている。一見、深い睡りにあるようだが、彼の肉体は、なお、高熱にうだって、生と死が相剋しているのだ。
看とる人々は、わずかにしわぶく音も、身じろぎしておきる衣ずれの気配もはばかるほどだった。
病人の淡紫の唇の色に、彼らの顔も気持もひたされている。

御簾のそとには、二十人あまりの名だたる人々が、これも、沈欝そのものの面差で坐っている。
管領、四職、数ヵ国もの守護職をつとめる有力大名、公卿……それに、この場所にちょうど似つかわしいような円頂の人物も二、三加わっている。
でも、これは義持の臨終を見越した、手回しのよさといったものではない。
僧職、とくに五山に列する名刹の僧は、義満の時以来、学問だけでなく、重要な政事にも進言するぐらいで、トップクラスの支配階級であった。
煎薬の異臭に、病臭をまぎらわせる燻香のにおいがつきまざって、屋内の空気は、いっそう重苦しかった。これもほどなく抹香のにおいにかわる……、だれもがそんな予期

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を抱いていた。

こそ、とも物音がしない――の表現もなお足りない。控える重臣たちも、眼交ぜさえしなかった。この大広間全体が静物と化している感じだった。

重臣のなかには、細川持之、現管領、畠山満家、それに、現四職の山名時熙がいた。

この三人こそ、四十年後に到来する応仁の大乱の立役者――細川勝元、畠山持国、山名宗全――の父親たちである。

それに、もう一つの管領家、斯波義淳の顔もみえる。義淳の孫も、行く末には大乱の火種の一つを引きうける。

彼らがひかえるところからは、くびだけのぞかせた義持の病褥が、何か、かすみがかった遠い世界のように見通せた。

事実、このいまにも四代将軍は遙遠のかなたへとび去ろうとしているのである。

木像のような面相で三人とも身じろぎもしないが、互いに同じ思惑をめぐらせていた。

足利家の次代をになう世継ぎの問題である。

義持病臥――の報をうけたとたん、だれの頭もこのことで占められた。

ここ三年間というものは、厳密には第何代将軍の天下といいがたい。義持が仕方なしに再度、就職しているかたちだった。

いま死の床にある義持はまだ四十二歳の血気おとろえぬ壮者だった。生涯の三分の二以上である三十一年間を将軍としてすごした人物である。

ふつうなら半生というべき、その全生涯をざっとみてみよう。

＊　＊　＊

義満の長男に生まれたこの義持は、父の全盛期においたち、九歳で将軍職をついだが、その後の経緯は、およそ、しあわせとはいいがたい。古来、帝王など最高君主に『孤独』はつきものである。

彼もその例にもれないが、長い将軍稼業の間には、肉親や臣下の離反、謀反――政事というより人間関係のむずかしさ、わずらわしさ――そしてあまりに長く在位したため、余人には分らぬ倦怠の苦痛――も味わってきている。

まず最初……義満は長男義持へ将軍職をゆずることで、かえって、それ以上の権勢を誇るようになった。

つまり、大御所になるが早いか、太政大臣の栄達が朝廷の手で叶えられたのである。

と思う間もなく、義満は頭を丸めてしまった。鹿苑院殿と世間からあがめられ、彼自身は太政大臣以上に位人臣をきわめたと信じて、満悦この上もなかった。

大明国皇帝から、日本国王と認める――云々の怪しげな

祝辞をもらって、ほくそ笑んだ時と同じ感覚で、彼は、いまに〈鹿苑上皇〉の称号が朝廷からもたらされる、と死の間際まで待ちこがれたのである。

こうした父を後ろ楯にして将軍をつとめる義持は、たえず抑圧感と気疲れをしいられた。北山殿、鹿苑寺金閣の創立者らしく、この父は義持には、やたらと金色燦然とまばゆく、そして、うっとうしい巨影だった。

その上、決定的に不幸なことは、父が義持を、死ぬまで忌避していたことである。公卿風に派手好みの義満は、自分とよく似た性格と風采の、次男義嗣の方がお気に入りだった。

義持の方は、そのたくましい身体が語るように、生まれつき武将肌であり、あまり堂上人のふんいきになじめなかった。足利家の嫡男らしく、関東武者の気風を尚んだ。これが父義満の意に叶わないようである。

長男であるため、義持に家督をつがせたものの、これを義満は生涯くやんでいた。

この義満が五十一歳で世を去った時、義持は若冠二十二歳だったが、すでに十年以上将軍職をつとめていたのである。

初めて彼は、自分自身で思うままにふるまう君主の心地になった。いままで、すぐ背後にそびえていた大樹がとり除かれ、彼の場所は陽ざしをあびた。

だが、同時に風がまともに吹きつけるようになる。父義満は、彼を庇う大樹でもあったのだ。

父の在世中、義持は彼なりに精いっぱい政務にはげんだつもりだった。だが、幕府の威令が遠い地方まで及ぶのも、父の威光と才腕がものをいったからである。

一歩退いて大御所におさまっていても、義満は変らず政事の要を握っていた。

やがて、父の遺志と称して、弟の義嗣はしきりに将軍職をゆずるようせがみだした。この、色白で才気をたのむ驕慢な弟は、義持の前途の腫れものとなる。

義満の死後六年目に、北畠満雅が幕府に反旗をひるがえした。南朝の残党をあつめて、義嗣を抱きこんだのである。

義満の時代にほとんどが鎮圧されたといわれるが、実際には、南朝の残党は足利幕府の縁の下でいつ何時燃え立つかしれない埋み火だった。

さいわいこの時は、北畠側と幕府の和睦が成り、義嗣も生命をながらえた。もはや義嗣は、すぐ近くで手ぐすね引く餓狼であり、義持は少しもこれから眼を放せず、一方では政務に追われなければならなかった。

二年後の応永二十三年――関東では、関東公方、足利持氏と臣下の関東管領、上杉禅秀が主従間で戦う形勢となった。

関東公方というのは室町将軍のひな型である。初代関東公方は尊氏の子、基氏がつとめた。

足利氏譜代を京都と関東とで磐石のものにしようというのが最初の主旨だったが、やがて対立を見るのは、当然の成行である。

いわば幕府の鎌倉出張所であり、関東公方の配下にはやはり管領職があるが、ここでは、詫間、犬懸、山内、扇谷の上杉四家が順番につとめている。侍所、政所、評定衆などの機構も京都と同様である。室町幕府に倣って営まれているわけだが、何のことはない、これは鎌倉時代の遺産に外ならない。「足利幕府は鎌倉が先」――この気概が多くの関東武士の頭から離れなかった。

この争いをみて、京都の義嗣は渡りに舟とばかりに、さっそく、上杉禅秀と、かねて持氏に不満をいだくその叔父、足利満隆――をはげまして、持氏を討たせようとした。

これが世上名高い〈禅秀の乱〉である。

義嗣の方は京都で、有力大名を味方につけて、兄義持を一挙におそう準備をすすめていた。

その有力大名というのも――管領家の斯波義淳、赤松満祐、畠山満則――など、そうそうたる顔ぶれである。

時を同じくして、京都と鎌倉で、家臣たちが、将軍や関東公方を襲う。

時宜を得た作戦である。まず間違いなく糾合できる味方の勢力は幕府側にひけをとらない。それに、戦況しだいでは、奥羽、九州、四国の武士も糾合できる。

義嗣は、気負った。

だが、意外なところで、破綻が生じた。それも、明日にも室町御所へ総攻めをかけようという段になってである。

義嗣は、より多く手近な味方を、と欲張って、近江の佐々木氏に呼びかけた。佐々木氏は、かねてから、義持に守護職をとりあげられて恨みをもっている、と見込んだのである。

だが、この読みは軽率だった。この土着の豪族は、何事でも沈着に行く末まで見通す近江人である。彼は義嗣からの誘いをやんわり断る一方で、いかにも忠勤ぶって、室町へ急報した。たちまち、義嗣は自分の邸で、徒手空拳のまま捕縛されてしまった。

こうなると、集まり始めていた大名たちも、盗人が忍び仕度を解くように、こっそり手勢を解散させ、各々、居館や国元へ戻って、素知らぬ顔をきめこんだ。

義持は冷汗三斗の思いを味わった。その後、彼らは臆面もなく、伺候してきた。彼ら以上に、義持は、素知らぬ顔で居なければならない。これが、政治というものだ、と彼は改めて痛感するのだった。

この事件は、二年後に義嗣を殺すことで何とかおさまり

がついた。自分に刃向ったとはいえ、実の弟を処断した義持は、己が胸を両断されるにひとしい不治の傷口を得たのである。幕府開闢以来、初めて肉親を屠った汚辱はどうにもぬぐえない。

また、これによって、同族ながら気を許せない関東勢力との間がけわしくなり、幕府はその脅威にさらされた。

義持の次の不幸は、いまから五年前、彼が三十六歳で、子の義量に家督をゆずったことが端緒である。

不幸――というのは当たらないかもしれないが、ともあれ成行はそうなった。

義持が政界から身を退くとみせて大御所になったのも、父義満の栄耀にならう魂胆――とも勘ぐられよう。

しかし、新たな五代将軍義量はまだ十七歳で、しかも心身ともに病弱だった。結局、政務は義持がみてやらねばならず、まったく名ばかりの将軍擁立である。

このことが本人の劣等感と激情をあおり立てた。それに、義量は、齢にしては異常なまでに大酒家であった。日日深酒をかさねて、しだいに身体はむしばまれていった。

こうして、あわれ、義量は在位二年たらずで早世してしまった。

十八歳の将軍は酒で溺死したも同様だった。まだ、女におぼれるまでもなかった。むろん後継ぎの子はない。

義持はすこぶる白けた思いで、ふたたび就職した。親、のあとに、子……と思う間もなく、再度、親が。五代、そのあとまた、四代将軍。この義持ぐらい、生涯たっぷり将軍運ならぬ、将軍縁に魅入られた人はない。

とりわけ、我が子に先立たれたあとの四年間の在職は、無感動なくされ縁といったものだった。

まだ壮年ながら、義持は、子のない七十、八十の翁と変わらぬあせりにかられた。義量をうしなったあと、男の子は生まれなかった。

身辺を見回すと、近親の男子としては、四人の弟がいる。だが、彼らはいずれも僧門に入っていた。

生まれた男子は、長男を世継ぎに決めて、あとはすべて出家させるのが、足利家のならいであった。これも、継嗣問題で足利の大統を危うからしめないための深慮である。

ここで厄介なのは、関東公方の足利持氏がにわかに動きだしたことだった。

――将軍になる権利は同族の自分にも当然あっておかしくない。この際、よろしければ関東公方の地位など返上しても、義持公の子なり養子なり、どんなかたちででも入籍して、次の六代将軍をつとめさせてほしい――

このように、ここ二年来、矢の催促をよこしている。むろん、室町幕府としては、とりあえないことだった。

義持は持氏の存在をいまさらに腹立たしく、かつ、気味悪く感じた。といって、あまりきっぱりとはねつけると、

短気者で鳴る持氏である。彼と傘下の関東武士が、乾坤一擲の挙に出かねない。

源平の合戦、鎌倉時代の承久の変、それに、わが始祖尊氏が都へ攻め上って開府にまでこぎつけた歴史を顧みて、義持はそぞろに寒気さえおぼえた。

かりにいま、持氏が関東一円の武士を糾合するだけでも、こうした歴史は楽にくり返されそうである。

「鎌倉殿（持氏）へのご返答、今回はいかように」

重臣たちは、三日にあげず早打ち馬でよこされる催促状のたびに当惑顔で、義持へとりつぐ。返事というより、断り方の文案をうかがうのである。やがて、

「その件り、なお熟慮しようぞ。いましばし待て……」

という婉曲な逃げ文句では、もう、相手をなだめきれなくなってきた。

ある日――義持は側近の一人に、急に独りごつようにこういったのである。

「この上は、僧門より弟を一人呼び戻すほかないようだの。とすれば……そのえらび方が問題だ。必ずや持氏ももその抽選に加えよ、と申し出よう」

その重臣は、虚をつかれた面持で尋ねた。

「抽選……といわれますが、いったい……どのようにして」

「予が思うに……くじで決めるしかないようだの。神前での抽選なら恰好もつこう」

「くじ……で」

「足利の大統をつぐ者をきめるのに抽選……とは、下司のたわむれのようでいささか気がひけるが、これなら関東の輩も否やをいえまい」

この時、義持は池面につぶてを投じるように、ふと、思いつきを述べただけだったろう。だが、これは重大な遺言となったのである。波紋はひろがって行く。

それから十日もたたぬうちに、いまのような不慮の事態を迎えたのである。

＊　＊　＊

あお向きのまま義持は眼をあけた。だが、うつろな瞳ではない。残りの精力を燃すような刮目であった。

病間の静謐は破られた。彼は、うめくとも、せきこむともつかぬ異様な声音をしぼりだした。豪奢な衾（掛けぶとん）がうねった。

病人はしきりに何かを訴えている。御台所の栄子がすざり寄って、夫の顔の上に身をかがめた。すぐに彼女は夫の意思を了解して、侍女へ小声で命じた。

「筆紙を……これへ」

病間には、早くから硯に墨をすり溜め、画仙紙も用意されていた。

衾の上側がまくられ、侍女が両側から病人の腕を支え

た。長患いのからだではない。その腕も、日頃武技を怠らない隆々たる肉づきのものである。

たっぷり墨をふくませた筆を御台所は病人にもたせた。指を一本一本折りこんでしっかりもたせるやり方である。筆をわしづかみにした感じで、腕もろとも、手はわなないた。

そして、何枚も重ねた画仙紙が、顔の真上にかざされた。これも、もう二人の侍女が病床の両側から、端をつかんで支えている。

「さ、したためられませ。み心やすらかに……」

御台所は、ささやくようにいって、うながした。いぜん、侍女に両腕を支えられながら、ぶるぶるふるえる筆先は、紙面へ下ろされる、のではなく……上へ行きついた。

大広間じゅうが息をのんだ。

この墨痕が、少くとも、いま、天下の舵となるのである。手のけいれんをあまさず移した不恰好な、ひら仮名の文字が、それもほとんどひとつながりの紐のような筆付を描いて行く。

《よつぎくじきめよ……》

その半ばで、墨が筆の柄を伝いおりた。たちまち、蒼ぐろい病人の顔は漆黒の鮮血を浴びた図になった。

淋漓――の形容そのままである。御台所も侍女もあわてて、枕辺の白布や布切れを求めて拭おうとした。

だが、そうするまでもなかった。

病人の手から筆がころげおち、墨の飛沫があたりに撒かれた。人々はいっせいに膝頭で立った。

義持はあお向けで刮目したままである。それは、およそ、――以って瞑じる……の趣には程遠い。

典医は明国に学んだ医者でこそ心得た仕種を示した。手首をとって、脈を診たあと、瞳をのぞきこんだ。

直後、納得したような顔になって、御台所の方へ両手をつき、深く頭をたれた。

「御他界遊ばされてござります」

地震が殴り書きした――ともいえるこの墨痕は義持最後の渾身の痕跡となった。これほど諸人注視のうちにしたためられた壮烈な遺言は例をみまい。

「末期の水」もとられ、故人の床のまわりがととのえられて行く。だれもが小声もはばかって、終始しめやかに動き回った。御所じゅうが水底にあるかのようで、銷沈以上のふんいきである。この空気のまま当分の間、日頃になく多忙になって行くだろう。

御台所の前で重臣は一人一人、愁傷を述べたあと、うちそろって、少しはなれた書院の間へ向った。現職を含めて、三管領家、四職家の統領七人である。

庭に面して離れ家然としたその書院は、ひそやかに協議

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com